

ブラック・ジャパン

赤瀬川 隼



新潮文庫

ブラック・ジャパン

新潮文庫

あ-26-1



昭和六十三年四月十五日 印刷
昭和六十三年四月二十五日 発行

著者 赤瀬川隼

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)二六六一五一一
編集部(〇三)二六六一五四〇
振替 東京四一八〇八番

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛へ送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社 製本・株式会社植木製本所
© Shun Akasegawa 1985 Printed in Japan

ISBN4-10-107411-9 C0193

新 潮 文 庫

ブラック・ジャパン

赤瀬川 隼 著



新 潮 社 版

4050

目次

ブラック・ジャパン	七
無名の日	五
日出ずる国のトポフ君	一九
草の上のボート	一六
ホモ・アピアランス	二〇

解説　ねじめ正一

ブ
ラ
ッ
ク
・
ジ
ャ
パ
ン

ブ
ラ
ッ
ク
・
ジ
ャ
パ
ン

一

十万人のざわめきが、一挙にどよめきと歓声に変わった。メイン・スタジアムのゲートにトップ・ランナーの姿がスイと現われたのだ。黒人である。上体の左右の揺れもなく、足ども坦々として乱れがない。西に傾き始めた陽光を浴びて、黒褐色の肌にかすかに滲んだ汗が妖しく美しく光っている。

スタジアムの大歓声のなかから、一つの声の束が生まれた。

「オスカー！」とも聞こえ、「ハスカル！」ともとれる。それが連呼となった。どこの国の選手だろう。四年まえのロサンゼルスオリンピックのマラソンでは、タンザニアのイカンガーやケニアのヌザウ、それにジブチのロブレールが六、七、八位と健闘したが、この男もアフリカ勢だろうか。それともアメリカの選手だろうか。

スタンドの歓声が、さらにもう一廻り大きくなった。五十メートルほど遅れて二位のランナーが姿を現わしたのだ。今度ははっきり東洋人とわかる。声援の大きさからすると地元の韓国か。それとも日本人か。あるいは中国の選手か。

その姿が見えるとともに新しい声の束が生まれ、これも連呼となった。

「タキー！」か、「タキー！」か。どうも日本人の姓のようである。先を走る黒人の坦々とした走り方にくらべると上体の揺れが大きく、疲労とも見えるし、また何とかして一位をとらえようとする気魄^{きぱく}の現われとも見える。しかし二者の距離は、いまのところ目に見えて縮まりも開きもしない。

大観衆がこのトラック上の死闘に熱狂し始めたころ、さらにもう一人の男の姿が二位に百メートルほど遅れて現われた。これは白人である。マラソンのランナーにしては長めの金髪がうしろへうしろへとなびき、白い肌が充血^{ちゅうけつ}していちごミルクのような色を帯びている。長身でストライドが力強い。ピッチを上げて二位との差を詰め始めた。これはどこの国だろう。三つめの連呼がスタンドから湧^わき起こった。はつきり「サローネン！」と聞こえる。フィンランドだろう。

ソウル・オリンピックの掉尾^{とうび}を飾る男子マラソンが、最後の最後になって願ってもないスリリングな展開になり、スタジアム全体が、火にかけられた巨大な鍋^{なべ}のようにたぎり立った。百五十メートルたらずの間隔に三人のランナー、しかも、黒人と東洋人と白人である。

ユーラシア大陸東北部の美しい半島の秋、抜けるような青空のもと澄み渡った大気を、三種^{さんしゆ}の連呼が鋭く貫き、まじり、たかまる。

一位と二位、二位と三位の差が縮まる。ギリ、ギリと縮まる。十万人の興奮は極に達して

いる。旗が打ち振られている。

見ると大きく揺れている旗は三種類である。スターズ・アンド・ストライプス、日の丸、それに白地に青十字のフィンランドの旗だ。してみるとやっぱり、トップを走る黒人はアメリカ、二位を行く東洋人は日本だったのだ。

トップがゴールまであと百メートルほどになったところで、三位のサローネンがダッシュをかけた。二位のタキイも負けてはいない。トップのオスカーに五メートルと迫る。三者の距離は二十メートルたらずとなる。スタンド全体が絶叫また絶叫。

ついにテープが切られた。オスカーが逃げ切った。手を伸ばせば彼の背中に届くような差で、タキイが続いてゴールを走り抜けた。それから三秒遅れてサローネンが入る。そのときようやく、四位の選手の姿がゲートに現われた。

スタンドの絶叫は余韻に変わった。旗の波も静かになった。しかし、たくさんの日の丸だけは衰えることなく、熱狂的に打ち振られ続けた。優勝を逸したとはいえ、間一髪まで追いついて二位となったタキイへの賞讃しょうさんであろう。優勝タイムは二時間五分四八秒、この記録をはじめ、二位と三位まで世界最高記録、オリンピック最高記録となった。百メートル、二百メートル、四百メートルリレーなど、短距離の王者アメリカは、ついに同時に男子マラソンの金メダルをも掌中に収めたか。

ところが、電光掲示板の一位には「ASUKA・JPN」と出たではないか。そして二位

に「TAKI・USA」の文字がある。オスカーと聞こえたのはアスカだったとして、一位の黒人が日本人で、二位の東洋人がアメリカ人だったとは。そんなはずはない。きっと電光掲示板のJPNとUSAを入れまちがえたのだろう。

しかし、それに注目する十万人のなかから、掲示板がまちがっていると言い出す人は一人もいなかった。そして日の丸の大旗小旗はいつまでも打ち振られ続けた。

もちろん掲示板の表示は正しかった。優勝した飛鳥太郎は日本人、二位に入ったハーブ・タキはアメリカ人である。

「ピート。南アフリカ共和国とは別の意味で、おれたちは日本のやり方を問題にしているんじゃないかな」

「ジェシー。きみがパラドックスの駆使に自信があるならやればいいだろう。おれはあきらめた」

「きみらしくないな。あいつら、太平洋の端っこの黄色い金持は、黒い金メダルを四つも取ったんだぞ」

「いいか、ジェシー。おれたちアメリカが、オリンピック史上、黒い金メダルをいくつ取ったと思う」

「――」

「いくつかは別にしてだな、日本の連中は二十四年まえに、自分たちの首都東京で、おれたち白い金持の黒い金メダルをいくつも目撃したわけだ。男子百メートルのヘイズ、二百メートルのカー」

「女子百メートルのタイアス、二百メートルのマガイアー」

「そのとおり。マラソンはうちではなかったが、やはり黒いアベベだった。そして四年まえのロスでは、短距離は例のルイスだ。女子だってそうだろ。アシュフォード以下、黒い金メダルのラッシュだった」

「しかしな、ピート。うちの黒い連中はな、何代もまえからアメリカに住んでいるんだぞ。くらべものにならんよ」

「しかし、その何代もまえの祖先たちは、どういう手段でアメリカに連れてこられたんだ。それにくらべて日本は奴隷船どれいせんを持つてはいない」

「ピート。きみはいつから歴史主義者になったんだ」

「ジェシー。きみとこんなことを言い合うなんて、もううんざりだよ。それに、そんなひまはないんだ。ここをどこだと思う」

「どうやらソウル・オリンピックのプレス・センターのようだな」

「それがわかってるのなら、さあ、仕事をしようぜ」

「わかってる。お互い給料生活者だからな。おい、ピート。モニター・テレビを見ろよ。日

本の黒い寶石だぜ」

「うむ、美しい」

日本の黒い寶石とは？ それはいましたが男子マラソンに優勝した飛鳥太郎のことではなかった。プレス・センターのモニター・テレビに映っているのは、日本選手団の占めるスタンドの一角に並ぶ、三人の女だった。そして彼女たちがすでに三つの金メダルを獲得しており、ジェシーの言ったとおり、飛鳥の優勝によって日本の黒い金メダルは四つになったのだった。

「エミリー。テレビに映されてるわよ」

「わかつてるわ、ジョージア。アメリカのABC放送って、しつこいわね」

小寺嬢慈亜、乙村恵美理、尾形真瑠雅麗多、この三人の美しいファースト・ネームの頭文字をつなげると、GEM——寶石となる。

彼女たちは、このオリンピックの前半のスケジュールですでに自分たちのプレーを終え、その後は悠々と他の競技を見物してきたのである。

その彼女たちのプレーとは——

尾形真瑠雅麗多・陸上女子百メートル優勝、乙村恵美理・同女子二百メートル優勝、小寺嬢慈亜は女子百メートル二位のほか、この二人と山本加代子の四人で女子四百メートルリレーに優勝、いずれも世界新記録による金メダルだった。山本加代子以外はすべて黒い肌の持

主である。

男子を含めて陸上の短距離といえ、それまでは日本が優勝するなどおよそ考えられない種目だった。優勝はおろか入賞さえむつかしいとされてきた。ところが、女子陸上の短距離の代表的三種目を日本が制覇したのだから、世界中が驚いてしまった。しかしすぐに、とまどいと疑問のほうに驚きを上廻るようになった。胸に小さな日の丸のマークをつけてテープを切ったのは、いずれも黒人だったのだから。そしていま、男子長距離の花であるマラソンにも、黒い日本人が一着でゴールインしたのである。

まず女子百メートルの決勝で、真瑠雅麗多と嬢慈亜がアメリカ代表の黒人選手をおさえて一、二着で走り込み、二百メートルで恵美理が同じくアメリカの黒人選手に勝って優勝したとき、さつきピートと会話を交わしていたアメリカの新聞記者ジェシーは、本社につきのよう書き送った。

「日本、金で黒い宝石を買い、金メダル二と銀メダラーを強奪」

さらに、四百メートルリレーでもアメリカが日本に負けて二位になると、ジェシーはタイプライターが壊れるような勢いで顔を真っ赤にしてキーを叩いた。

「黄色い金持、経済摩擦の次は人種摩擦」

さて、最終日の今日、ジェシーは新しいタイププライターに向かってどういふことを打ち叩くことだろう。

「IOCは日本の国籍法をチェックすべし」

か。しかし多分彼はそうやりかけて、日本の国籍法も自国の国籍法もいままで詳しく調べたことがないことに気づき、表現を訂正するかも知れない。

「アメリカで育ったマルガレータとジョージアの金銀はアメリカのものである。ケニアで育ったエミリーの金はケニアのもの、そしてタンザニア生まれのアスカルの金はタンザニアのものである。日本はメダルを返還すべし」

一方、最前列にG.E.M.が並んで腰をおろしている日本の選手団席のうしろのほうでは、日本オリンピック委員会の二人の男が、ぼそぼそとした会話を交わしていた。

「日本は勝ったんだな」

「そう、日本は勝った」

「喜んでいいんだろうな」

「きみが飛鳥太郎と同じ日本人ならね」

「頭のなかではそうだ」

「それでいいじゃないか」

「しかし、いま目のままで展開された劇的なレースは、何というか……」

「ふむ、日本の滝がアメリカのアスカルに惜敗したと言いたいんだろう」